

現宮城郡宮城町。本文にある如く、別荘は貞享四年に工事をはじめ、元禄三年三月に完成し、寿楽園と称した。……』とあるが、完成は元禄元年、寿楽園は楽寿園が正しい。

「節翁古談」〔「仙台叢書」第3巻之内。第5代伊達吉村の命により、第6代宗村に伊東祐栄（号節翁）が、第4代綱村の性行業績について進講した。後に萱場奎が、その記憶を思い起して記述したもの。〕に、郷六御殿は御城の離れ曲輪と記しているが、専ら軍事目的から構築されたという根拠はない。

注(4) 庭園。

注(5) 曲りわだかまる。

注(6) 舞うさま。

注(7) 使に同じ。させる。

注(8) 仙台をいう。

資料 奥羽観蹟聞老志巻之6（佐久間洞巖）

47. 「性善孺人」とは

問 「伊達世臣家譜」に「性善孺人」とあるのは、どのような人ですか。

答 「性善孺人」〔しょうぜんじゅじん〕は、「伊達世臣家譜」に次のように載っています。⁽¹⁾

1. 「坂」（巻之5一族之部）

『〔前略〕信之有末女入為世子⁽²⁾山公⁽³⁾側室⁽⁴⁾諱世勢、落飾性善院寛保二年四月十九日生、宝曆十三年三月七日卒、〔下略〕』

2. 「板橋」（巻之15平士之部）

『〔前略〕小右衛門胤清、享保十一年〔1726〕五月獅山公之時、試小姓、十二年二月為真、十三年二月進奥小姓、一病免、忠山公世子、為膳番、世子領国、延享四年〔1747〕五月慰勞積務、⁽⁵⁾加増二兩二歩三口、寛延四年〔1751〕二月遷二丸留守居、給官資若干、為中百石、宝暦八年〔1758〕十一月今公〔第7代重村〕之初、属于性善孺人、十二年八月加増、於是為今之祿〔119石4斗2升〕、十三年二月、遭孺人逝、併賜遺物及遺金若干、〔下略〕』

「伊達世臣家譜」は漢文体で書かれていますので、用語は漢語であることに注意しなければなりません。「孺人」も漢語で、大夫の妻のことです。「孺」は「属」で、夫に附属して自らは事を専らにしないという意味があります。「伊達世臣家譜」では、君侯の正室を「夫人」、側室を「孺人」と使い分けています。「性善孺人」は、上記1の坂家の家譜に記されている通り、坂信之の末女で、第6代伊達吉村の側室となった信子の方で、宝暦6年〔1756〕5月24日吉村

が逝去した時、落飾して性善院と号しました。以後、「性善孺人」と呼ばれることになったのであります。

注(1) P. 49 注(2)参照。

注(2) 「東藩史稿」巻之10（作並清亮）に次の記事がある。

『〔忠山公〕側室坂氏、信子、與世ト称ス、正三郎信之ノ女、久米之丞君、重村公〔第7代〕、藤七郎君、正敦君〔堀田〕、沛姫、愷姫、認姫、直姫、従姫ヲ生ム、宝暦六年十一月、班公子ニ準ス、十三年〔1763〕三月七日逝ス、年四十五、性善院真林浄節尼大姉ト号ス、両足山大年寺ニ葬ム、坂氏姓ハ藤原、初メ佐賀氏ト云、後チ坂ニ改ム、其先世伊達ノ家臣ナリ、世系伝ハラス、坂平内重統ヲ以テ祖トナス、重統初メ生レテ、父佐賀総七歿ス、是ヲ以テ収祿セラル、寛永元年〔1624〕新ニ俸ヲ重統ニ賜ヒ、広間番士ト為ス、重統ノ子五郎太夫信中、三百石ヲ賜ヒ、永代召出ニ列ス、宝暦六年〔1756〕着座トナリ、明和元年〔1764〕一族ニ列セラル、其子喜太夫信要、其子三郎信安、其子能登時保、時保伊達安芸村常ノ四男、要人常直ヲ養テ嗣トナス、常直亦平賀美濃雅幹ノ二子能登保定ヲ嗣トナス、二子英力時秀家ヲ承ク、慶応三年〔1867〕奉行職トナル、明治二年、客歳戦争ノ首謀ト云ヲ以テ死ヲ賜フ、年三十七、子琢治今軍吏タリ、』

坂英力についてはP. 442 注(8)参照。

注(3) 第6代伊達宗村。P. 36 注(5)参照。

注(4) 第5代伊達吉村。P. 465 注(6)参照。

注(5) 第7代伊達重村。P. 17 注(2)参照。

注(6) 「礼記」『天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人』とある。

資料 伊達世臣家譜巻之5（田辺希文等編）

東藩史稿巻之10（作並清亮）

大漢和辞典（諸橋轍次）

48. 藪賢人とは

問 昔、仙台に藪賢人がいたというのが、どのような人をいったのですか。

答 文化から天保年代にかけて、内海深之助〔うちみふかのすけ〕という大番士(1)がいました。屋敷中荒れるにまかせ、居住や身辺や外見には一切極端なまでに無頓着、それにひきかえ文武の修練抜群で、内面の最も充実していた人物だったので、世に藪賢人と称せられたのであります。